世界遺産の法隆寺

法隆寺は世界遺産にも登録され、日本最古の木造建築です。聖徳太子の在世した時代の日本は朝鮮半島や大陸と深い関わりを持っていました。当時、中国では国が一七〇年間、南北に分立した後、隋がわずか四十年間で全中国を統一してしまいました。その情勢を朝鮮半島を通じて知っていた厩戸皇子（聖徳太子）らは小野妹子達を遣隋使として派遣したといいます。中国の先進文化である仏教を導入し、日本の国際的な地位を高めなければ日本が立ちゆかないと考えていたからです。「日出ずる国の天子より日沈む国の天子へ」の書簡を随に送り、それを受け取った煬帝が、「天子は我一人のみ。無礼千万」と怒った話は大変有名ですが超大国の随に対する太子らの外交戦略は、朝鮮半島情勢を細かく読んだ上でのものだったので、結局は随も日本へ使節を送り、日本の国家的地位を高めるのに役だちました。随も朝鮮半島安定のためには日本と関係をもつのが有利と考えたからです。大国との外交を外堀から埋め戦略的に行ったのです。

山吹の咲く中宮寺

住所　奈良市斑鳩町法隆寺北１の１の２
電話　０７４５　７５　２１０６
花どき　山吹（四月）

法

法隆寺の北側の細い道を歩くとすぐに中宮寺に至ります。中宮寺は。創建当時から尼寺だったらしい。聖徳太子の母の穴穂部間人（あなほべのはしひと）皇女の住居を尼寺にしたものであると言われています。中宮寺の本堂はまわりに池があって春には八重一重の山吹が美しく咲きます。寝殿造り風の本堂は昭和時代になってからの再建ですが、本堂には優美な姿の弥勒菩薩像があります。聖徳太子の死後、妃の橘の郎女（たちばなのいらつめ）が太子が住む天寿国を忍ぶために推古天皇に願い出てつくらせたと伝えられる天寿国繍帳（てんじゅこくしゅうちょう）もあります。この天寿国繍帳に描かれているのは聖徳太子が往生した天寿国の様子だそうです。本当はこの天寿国繍帳はこの時代よりもずっとあとの天武朝につくられたものであることが判明しているそうですが、そういう野暮な話は抜きにして国宝です。

世界遺産　法起寺

住所　奈良市斑鳩町岡本１８７３
電話　０７４５　７５　５５５９
花どき　蓮花（四月）コスモス（九月）

法輪寺からすぐのところに法起寺があります。また、松尾寺から車で降りてくると法起寺の横へ出てきます。法起寺は「ほっきじ」とも「ほうきじ」とも読まれます。十月中旬から十一月初旬にかけて法起寺周辺の田んぼにコスモスが満開になります。地元の人が地域おこしのため休耕田を利用してコスモスを播いています。周辺には柿の林も多く、休日には、隣の法輪寺もこの法起寺も写真撮影の人や、絵画グループの集団がいっぱい来て、絵を描いたり、カメラを構えたりしています。のどかな田園地帯にあって法隆寺ほどかたくるしくなく、まことに斑鳩らしい風景だからでしょう。田んぼを踏み荒らしたりゴミを捨てたりしないようにしたいものです。日本最古の木造の三重の塔があり、世界遺産に登録されています。

日本最古の法起寺三重の塔

法起寺でひときわ目立つのが三重の塔で飛鳥様式の日本最古の塔です。三重の塔ではわが国最大のものです。法隆寺と共に日本で最初に世界遺産に登録されたこの寺は斑鳩を代表する寺で、聖徳太子創建の七寺の一つです。もともと七伽藍の大寺でした。法隆寺の塔、法輪寺の塔と並んで、「斑鳩三塔」と言われています。三重の塔以外の建物は室町時代に再建されたものです。法起寺の位置は斑鳩の入り口にあたり、この辺は柿畑が点在しており、柿の販売所も多い。「柿食えば鐘がなるなり法隆寺」と言う句を思い出します。この絵は夏に柿の販売所のある方から描きました。道路を挟んで反対側の山にある柿園の方からの風景もいい。コスモスや菜の花が広がる田んぼの方から見る法起寺も圧巻ですが、柿の木の間から見る法起寺はさらに自然体でいいと思います。

法輪寺遠望

法輪寺
住所　奈良市斑鳩町三井１５７０
電話　０７４５　７５　２６８６
花どき　菜の花（３月末～４月）
紅葉（十一月末～十二月初）

法輪寺は三井の里という小さな集落にあり、春の新緑、秋の紅葉が非常に美しい寺です。周りが田園なので稲田やレンゲ、菜の花柿園の中でその堂塔と林が目立ちます。春先の菜の花も美しい。どの季節にも絵を描く団体がやってきて絵を描いています。

法輪寺は六二〇年（推古三〇年）、聖徳太子の皇子、山背大兄（やましろのおおえ）が建立したといわれます。

外から見た風景だけでやなく堂の中へ入っても威厳を放つ仏像群に感動します。

法輪寺の三重の塔

斑鳩町三井一五七〇　（電話　〇七四五―七五―二六八六）

法隆寺から北へ約1キロ、田んぼの中に法輪寺（ほうりんじ）があります。法隆寺とともに、ユネスコの世界遺産のひとつ。春には蓮花や菜の花、秋には紅葉やコスモス、柿の実が寺に色彩を添えて美しくなります。平安時代までは大いに栄え、堂塔伽藍が林立していたそうですが三重の塔は戦時中の昭和十九年七月の落雷でわずか一時間そこそこで焼けてしまいました。

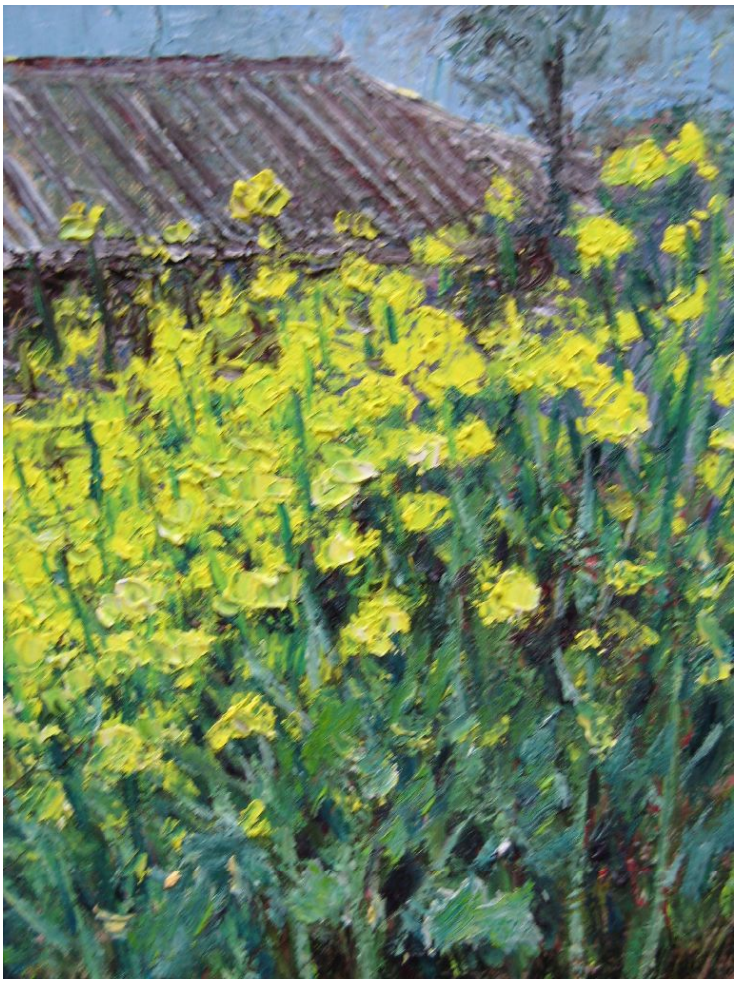
現在の塔は昭和五〇年に、小説家幸田露伴の娘の幸田文（あや）さん等が再建に尽力されたことで有名です。法輪寺はもともと容姿の美しい寺ですので、左右前後どちらから見ても絵になる寺です。

法輪寺の三重の塔

斑鳩の春

国際社会情勢の激変により、国の進路を見失いがちになった時に新しい動きつくりを模索する動きが出ます。蘇我馬子や厩戸皇子（聖徳太子）の時代もそうでした。当時の先進文明であった仏教を国外から導入し、日本統治の新しい動きつくりを進めましたが、その後、斑鳩に宮を移した聖徳太子は、飛鳥から斑鳩の宮まで全長十七キロの道（太子道）を馬に乗って通ったそうです。自動車で行くのにも遠いなと感じる距離です。

聖徳太子がなぜ飛鳥から斑鳩に住居を移したかには諸説あります。権力闘争のうずまく飛鳥に嫌気がさしたのだとか、斑鳩は大和川を中心とする水陸交通の要地で、難波へは飛鳥からよりはるかに近く、ここを押さえ、斑鳩に新羅や隋の文化を取り入れた新文化圏の建設を図ろうとしたなどいくつかの説があります。菜の花の咲く斑鳩の里は、今では、古代の権力闘争もなく静かでのどかです。



矢田寺のあじさい

住所　大和郡山市矢田町３５４９
電話　０７４３　５３　１４４５
花どき　あじさい（６月）

矢田寺の満米上人は、「三熱の苦しみから離れる為に菩薩戒を受けたい」と望まれた閻魔大王に菩薩戒を授けられました。閻魔大王は、そのお礼に満米上人を地獄に案内してくれました。地獄のの猛火の中で、亡者の身代わりになって、地獄の責め苦を受ける地蔵菩薩のお姿を拝し、上人は教えを請われました。地蔵菩薩は「苦果を恐れるものは我に縁を結ぶべし。わが姿を一度拝し、わが名を一度唱える者は必ず救われる。」と答えられたそうです。寺へ帰った満米上人はその地蔵菩薩のお姿を彫ろうとしましたができません。そこへ、四人の翁が寺へ訪れ、地獄で上人が拝んだそのままの地蔵菩薩の姿を三日三晩のうちに桐の木に彫り上げ、「我らは仏法守護の神である。」と告げて奈良の春日山へと飛び去られたそうです。

アジサイ寺とも呼ばれる矢田寺

矢田寺のみそなめ地蔵

矢田寺は、花の寺です。特にあじさいは、その季節になると、六〇〇種八〇〇〇株が咲き乱れて、おみごとと賞賛するに尽きます。境内の中にある「味噌なめ地蔵」さんはそのお口に味噌を塗るとおいしい味噌になるという伝説があります。今でもどなたかが味噌を塗っておられるのかなと思ってみましたが、そんな気配はなく綺麗なお口をしておられました。矢田は、邪馬台国の想定地にもなっており、卑弥呼の里として毎年、卑弥呼コンテストが開かれるそうです。

矢田寺のみそなめ地蔵

松尾寺の三重の塔

住所　大和郡山市
電話　０７４３　５３　１４４５
花どき　薔薇（六月）

矢田寺から程近いところの山の中ほどに松尾寺があります。日本最古の厄除け観音のお寺と言われています。松尾寺は、日本書紀の完成を願って天武天皇の皇子、舎人親王（とねりしんのう）が厄よけのためにつくった寺であるいいます。勅命によって「日本書紀」を編纂した舎人親王は、四十二歳の厄年に日本書紀の無事完成と厄よけの願をかけて松尾寺を建立したそうです。日本書紀は、日本国内向けというよりは、外国向けに書かれたものであると言われ、当時の東アジアの公用語といってもよい漢文で書かれています。そういう意味では時の朝廷に都合の悪いことは書かなかったとしても当然のことであると言えます。混乱する朝鮮半島情勢と随の権勢の中での国史編纂であればなおさらです。松尾山を下ると、斑鳩の里の法起寺の横へ出てきます。

松尾寺の三重の塔